
それが幸せだった

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが幸せだった

【Nコード】

N0994Z

【作者名】

ログ

【あらすじ】

求めたのは、きっとこの瞬間。

◇ 第一話

寒い冬。季節はずれの海。誰も居ない浜辺。吹き荒れる潮風と降り積もる雪は容赦なく体温を奪っていく。

僕は、動けなかった。その光景は僕の思考を止めるのには充分だったから。

待ってる。

彼女はそう言っていた。なのに。
どうして？

「……神様。どうか……」

大切なものは何か、失ってから気づく。

僕は何を見ていたんだろう。どうして彼女を第一に考えなかったんだろう。いまさらな後悔は巡るばかりで、ぐるぐると頭を旋回する。

彼女は永遠に奪われた。

肩に雪が積もる。けれど、それを振り払う余力は僕には残ってない。

もう、何も考えたくない。

「神様。どうか……」

お願いだから。

なにもわがままなんか言わないから。
どうか。

「彼女を……」

返してください——……。



「閻魔様。どうされました？」

目を開けると、心配そうに私を覗き込む赤毛の男が居た。

ああ、そうだ。いつものようにこの大きな机に向かい、鬼籍を見ようと柔らかな椅子に腰掛けた私。けれどそのまま眠気に勝てず眠っていたらしい。

——なにを、見ていたっけ？

覚えていない。けれど、何か切なくなるような。胸が痛むような。そんな夢を、見ていた気がする。

「……いや、何も無い。私は寝ていたんだな」

「はい。少々うなされていたようですが……」

「ああ、大丈夫だ。それよりツカサ、今日の死者の確認をしておいてくれ。私のところに来る人物は一人のみだ」

「ならば他は神に明け渡していいので？」

「ああ」

閻魔、と言うのはなんと楽なのか。死者を全て裁くわけではない。決められた死者を地獄に送り込むのみ。ほかの数万の死者たちは「神」の元に送られるため、大変なのは「神」のほうだ。

「閻魔様、この老人、大丈夫ですかね」

私の元に来る一人の客のデータを見ながら、ツカサは眉を寄せた。

「老人？ 珍しいな。私の元に老人が来るなど」

だいたい、若者が来るんだが。

データを見ると、人畜無害そうな老人が一人写っている。しわしわの顔からは幸せな人生を送ったとしか取れない雰囲気。どうしてこんな老人が……？

「御年89歳。結構生きましたね。それにしても地獄を望むとは……」

「……ああ。本当に珍しいこともあるものだな。いつ来ると？」

「分かりませんが、神からの電報では老人の意思に任せるとの事でした」

つまり、老人が来たいときに来る、と。

ため息を吐き、椅子に深く体を沈める。

ここに送られるのは、自ら希望した死者のみだ。地獄に行くのを希望するなんて、と思うかもしれないが、意外と居たりする。神の元に行けば楽に転生の道を歩めるが、こっちは苦難の道を辿ることになるにも関わらず。さらに意外にも、苦難を志望するのは若くして死んだ者たちが多いのだ。老人は氣力がないから神の元に行くのだと思うが。

「……崎田浩一……」
さきたこういち

その老人の名を読んでみるが、まったく心当たりは無い。

まあはじめから生前の記憶は無いのだけれど。

「あ。閻魔様、来られたようです、通してよろしいですか？」

広い部屋に堂々とそびえているその大きな扉を見つめ、ツカサが私に尋ねた。

意外と早かったな。

視線で答えると、ツカサはクイツと指を動かした。ゆっくりとその扉が開く。その先には、データに載っていたあの老人が立っていた。

ああ、本当に何でこんな老人がここに……。

「失礼しますよ」

「ええ、どうぞ。いらっしやいませ、崎田様」

こちらに向かってくる老人を出迎えるため、私も部屋の中央にあるテーブルに近づく。座るよう促すが、老人は私の顔をジッと見つめてくるばかりで、動く気はないようだ。

なんだろう。

「ああ、あなたが……お会いできるのを楽しみにしていました。ありがとうございます」

……？

意味が分からず首をかしげると、老人はにっこりと微笑みソファに座り込んだ。私もそれに続く。

「……私を、ご存知だったんですか？」

「ええ、よく聞いています。僕はあなたを越えられなかった。悔しいですが」

「……いや、何の話か、よく分からないのですが……」

警鐘。私の頭で、危険だとわんわん鳴り響く。

これは、きっと、聞かないほうがいい。けれど、聞かなければ、と、思ってしまう。

本能と理性。赤信号。

「？ あなたは藤家時也さんですよね？」

フ ジ イ エ ト キ ヤ。

単語のように流れてきたその名前は、私の頭に大きな衝撃を与えた。

けれど分からない。

わたしじゃない。わたしになまえなんかない。それはだれだ。このろうじんはだれとかんちがいしてるんだ。

「閻魔様？ 顔色が……」

「どうされました藤家さん。……僕が何かまずいことでも……」

頭が痛い。ただそれだけだった。割れるような痛みには耐えながら

老人を見つめるが、帰ってくるのは困惑した視線。

そんな目をされても、私は、

「……失礼ですが、勘違いではないでしょうか。私に、名は、ありません」

「え、そうなんですか？　ですが、「神様」が「藤家時也」に会える、と言ってこの道を教えてくださったのです……」

あの人はいったい何を吹き込んでいるんだ。

「残念ですが、私は……」

「……そうですか……やっと彼女の想い人に会えたかと思いましたのに……」

「……彼女？　想い人？」

聞いて、ハツとした。

私には関係ないことだ。聞く必要なんかないのに。

「ええ。僕の妻には忘れられない人、というのが居ましてね。それが「藤家時也」さんだと聞いたので会いたかったのですが、彼女が「死んだ」と言っていたので……」

人間は馬鹿だ。どうして「一番」じゃないのにそれでも良しと思えるのか。

それが声に出していたらしく、老人は寂しそうに笑んだ。

「良かったんですよ、僕は。あなたを愛している彼女を愛したんですから。藤家さん、あなたはどうしても、こんなところに……？」

老人の中で、私はもう「藤家さん」になってしまったらしい。もう否定も面倒くさいので、放っておこう。

「……さあ。覚えていないんです。ここに来た時のこと、生前のこと。何もかも空っぽで、本当に私が生きていたことがあったのかさえ危うい」

目を覚ますと、真っ白な空間に居た。最初に見たのはやけに身長の高い男。白い髪に白い肌。服も全部真っ白で、全てがこの空間に溶け込んでいた。その男は自らを「神」と名乗り、私に選択肢を与えた。

神となるか。

閻魔となるか。

それが、私の最初の記憶。

「……藤家さんは、彼女の言ったとおりの方ですね」

「え？」

「彼女が言っていたんです。あの人は寂しい人だった。いつも寂しげに笑っていて、私はいつも守らなきゃって思ったって」

いつか、言われたことがある気がする。いつだったか。どこだったか。もう思い出せないその記憶に頭が痛む。

フラッシュバックと言うのだろうか。一瞬、映像が過ぎった。

笑顔の女が、私を呼ぶ。

幸せな気持ちで溢れて、私は近寄って……

「違うッ！」

突然叫んだ私に、ツカサと老人はビクリと震えた。目を丸くしている二人に気づかず、私は痛む頭を抱える。

違う。違う違う。

私は、そんな名前じゃない。私に生前などない。思い出したくない。知りたくない。

私は。イヤだ。私は。私は。イヤだ。イヤだイヤだ。私は……
僕は、

二度と、あんな、思いは……。

「トキヤ。お前はもう許されてるよ」

その声に振り返ると、一番最初に会った真っ白な男が腕を組んで飄々と立っていた。

「……あんたは、何をたくらんでる……！　なんで私にこんなことを……」

「おお、ひどいな。俺はただお前のためにと考えたのに」
悪びれも無くにやりと笑っているその男は、「神」と呼ばれる最
高位の者。

何が私のため、だ。自分が一番楽しんでいるくせに……！

「神、この世界に来て大丈夫なのですか？」

「んあ？ ああ、余裕だな。ツカサ、お前も俺に声をかけるなんて
成長したなあ」

「嫌いには変わりありませんが、それでも上司ですから。……あな
たの狙いは何ですか？」

「お前も俺が何か企んでいると？」

「あなたが何も企まないことが今までにおありで？」

沈黙。老人はわけが分からないだろうに、それでも神と私を交互
に見やる。

「トキヤ。俺はお前をよく知ってる。……思い出したく無いのか？」

「藤家さん。雪はあなたを本当に愛していました。きっと今もでし
よう。それを、思い出したくないなんて言わないでください」

老人は痛そうに顔を歪めて私を見つめた。

出てきたその名前に、またも頭が痛み始める。

雪。

知っている。私は、その名前を知っている。けれど。

「私は、知らない。そんなもの、知らない。思い出したくない。思
い出しちゃいけない。私は、だめだ。もう、苦しむのは……」

「神、閻魔様が壊れてしまいます！ 笑ってないで助けてください
！」

「藤家さん！ 顔色が本当に……」

ツカサと老人が駆け寄ってくる。けどそれに構える余裕は無い。
痛い。頭が痛い。

霞んでいく視界の中で最後に見たのは、楽しそうに笑う真っ白な

男の顔だった。



母が倒れた。それを聞いた僕は、真っ先に病院に向かった。父が亡くなってもう四年。僕は当時中一で、これからお金がかかるという時だ。母はそれを察してか、仕事を掛け持ちして貯金を始めた。それが崇ったのか。

母は過労で倒れた。

「あたしゃ大丈夫だよ。心配性だね」

「あのねえ、母さんもう年なんだから、仕事掛け持ってるのがおかしいの。僕もバイトしてるんだから大丈夫だって」

「だめ。そのお金はあんたが稼いだもんなんだから自分で使いなさい」

「なら母さんが稼いだ金は母さんが使って」

「そりゃできないよ。あたしはあんたの親なんだから」

なんて屁理屈だ。もう僕も高二だ。それなりに大人なつもりだし、働いてだっている。だからそんなにがんばらなくてもいいのに。

僕はそんなに頼りないだろうか。

「はあ。いい？ ゆっくり休んでよ。二度と無理はしないように」
飲み物買ってくるよ。そう言い残して、僕は病室を出た。

僕は親孝行できているのだろうか。大変だと思う。女手一つで子供を育て上げるのは。まだ中学生だったから良かったものの、でもそんな問題でもなくて。

心でため息を吐き、自販機の前に立った。

母は、何が好きだったっけ？

「……すみません。今、お金落とされませんでしたか？」

頭一つ分下から、かわいらしい声が聞こえた。見下ろすと、目を覆うようにぐるぐると頭に包帯を巻いている女の子が居る。

……お金？　べつに……

「落としてませんが……」

僕がそう答えると、女の子は「そうですか。ありがとうございますしました」と言って、少し離れたところに居たおばさんに同じ事を聞きに行った。

目が見えないのに、大変だろう。お金なんか放っておけばいいのに。

おばさんも違っていたらしく、女の子は次の人に聞きに行っている。

……ああ、もう。

「すみません。僕も手伝いしましょうか？」

この子一人だと日が暮れそうだ。

僕の提案に、女の子はビクリと震えた。

「あ、あなたは、さっきの……あ、でも大丈夫ですか？　お時間……」

「大丈夫です。ほら、一緒に探しましょう」

柔らかく言うと、女の子はやっと笑顔を見せた。と言っても目元は見えないけど。

それから二人で百円の持ち主を探し、開始三分で見つけた。やつぱり目が見えるというのは何事も早く片付ける。

「ありがとうございます。私一人では絶対見つかりませんでした」

「いえいえ。部屋まで送りますよ。危ないですから」

「え、あ、ありがとうございます。でも、これ以上は……」

「大丈夫ですから。ほら、行きましょう」

彼女の病室は母の二つ隣だった。今居る彼女の病室は三階。さっきまで居たのは一階だ。どうやって目の見えない子があそこまで行

けたのか。そのまま尋ねると、看護師さんに連れてきてもらった、と困ったように答えた。目が分からないから表情までは正確には分からないけど。

彼女の居る個室は広く、特に何も無い。そんな病室にぽつんとあるベッドに腰掛けると、彼女は深々と僕に頭を下げた。

「ありがとうございます。本当に、何から何まで」

「いえ。どうしてあそこに？」

「あ、お母さんがさっきまで来てて、お話してたんです。目が見えるようになったらどこ行きたい？ とか、まず何しようか、とか」

あ、そういえば。

「目、を、患ってるんでしたね、えっと……」

「水野雪って言います」

「あ、水野さんは」

「はい。生まれつきのものでして、この間手術したんです。あと数日でこの包帯も外せるんですよ」

生まれつき目が見えないというのは、辛いことなんじゃないだろうか。自分の顔はもちろん、親の顔さえ分からない。色も知らない。信じられるのは音と感触だけ。

「……がんばりましたね、今まで」

だって、人間は目に見えるものを信じる生き物だから。

「……は、い。がんばり、ました……」

ポカンと開いた口からは、拍子抜けした、と容易に伝わる。

僕が何か変なことを言ったのだろうか。

「みんな「可哀想」って言うので……ちょっと驚きました……」

反応に困ってしまったらしい。嫌がってないのなら、まあ良かった。

……あ。

「すみません。母の飲み物届けないと……」

「あ、そうですか。あの、本当にありがとうございます」

「いえ。また来ます。来ていいですか？」

「はい！ あの、お名前はなんていうんですか？」

いまさらなその質問に、僕はそういえば教えてなかったつけ、と思います。

ああ、彼女には名乗らせているのに……僕はなんて失礼だったのか。

「藤家時也です。じゃあ、また来ますね、水野さん」

「は、はい！ 待ってます！」

ああ、きつと今、彼女は嬉しそうに笑っているんだろう。彼女を振り返りながら密かに笑むと、僕は母の病室に戻った。

後にして思えば、このときから彼女が気になっていたのかもしれない。

けれど僕は、何も知らず、気づかず、ただ「明日」を待っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994z/>

それが幸せだった

2011年12月3日20時49分発行